

洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

随想

京大名誉教授・工博
大正六年卒
松田長三郎

この会報が皆さんにお届きする頃は、陽春四月である。目出度く志望の就職先や学校に入られた人達にとっては、正にわが世の春の感がありましよう。得意の人・失意の人、明暗交々であらうが、しかし永い人生を考えるといずれの側の人達もおごることなく、打ちひしがれることもなく、誠心誠意、誠と熱意をつくすことであると思う。今日のような激動の時代においては、人間の本質的な問題、「人生とは何か」、「人間の生きがいとは何か」というような根本的な問題に、殊に若い世代の人達はそれこそ真剣に思索し、深刻な悩みを抱く人も多いにちがいない。一時、世界を蔽った大学紛争の如きも、青年の斯かる切実な思考の表われであったかも知れぬ。今、わが国では不十分な点はあっても、発達途上国に比べると一応

は多少豊かな生活を送れるように見えていても、精神的には非常に不安定な焦燥の感に追い立てられていような感で、こういう時代も珍らしいのではあるまいか。殊に中東戦争以来、石油危機に端を発した物不足、インフレ時代に国を挙げてテンヤワンの狼狽振り、国会の予算委員会などでその実情が究明されているが、経済に疎い私などは、意外に思うことが誠に多い。経済大国にはなつたが精神的中味は空っぽで太った豚たちよりは、やせたソクラテスを選ぶと云った人もいる。

現存している人で私が敬服する人の一人は、英国のアーノルド・J・トインビーである。同氏は過去3回、来日されたことのある著名の思想家・評論家であるが、その専攻は古代史の学者であるが、その思想・倫理感の世界の有識者の傾聴するところである。現在八十四歳の高齢にもかかわらず、その考え方は自認しておられる通り偏見もあるであろうが、大変柔軟のようである。私の懇意にしている京都産業大学の創立者であり総長でもある荒木俊馬博士は、屢々世界有数の学者・思想家を招いて講演会を開いて来られたが、トインビー博士もその一人であつて来日当時は、各所での講演を通じてわが国の言論界に異常な刺激を与えられた。これによつてこの思想家をして一層日本文化や歴史に興味を覚えさせ、日本と深く結びつけるきづなとなつたことと思う。その後、同大学の若泉教授はロンドンに同博士を訪ね、現代の若い世代のもつている種々の疑問に対して対談の形式で解明を求め、同博士も「日本の若い世代は世界の若い世代のスポークスマンである」として快よくこの求めに応じ、この対談は当時毎日新聞紙上に九十数回に亘つて連載せられ、これが一本に纏められて「未来に生きる」として同社から出版せられた。

私は講演の前の短かい時間、同博士夫妻と接する機会を得たが二人の実に謙虚な温かい人柄に打たれたことがある。世界の未来は、今後どのように進展して行くか予測はむずかしいが、同博士の懇切な示教は、たしかに若い世代の人々に大きな心の拠り所を与えてくれることが多いと思う。

最近わが国でのショッピングな出来事は、小野田さんの生還である。三十年に及ぶジャングルでの原始生活は言語に絶する御苦労であり自己に課せられた任務使命を完遂一途に明け暮れた日々では、身は敵地に在り、いつなん時生命を脅かされるか判らぬものであつた。その不安恐怖は恐らくその経験の無い者には想像も出来ない所であらう。帰還に際して、新聞・ラジオ・テレビなど報道機関は、一斉に、少し熱狂し過ぎたかと思われる位に、大々的に報道した。少し冷静になつて考えて見ると、これに対していろいろの見解や批判が報ぜられた。身命を賭けて課せられた使命を果たす使命感とその不屈不撓の強じんな気力・精神力に対しては感嘆せざるを得ぬ。時代感覚の異なる各世代の人々により、人様々の受け留め方はあろうが、頭の下がる思いがする。横井さんと云い、小野田さんと云い、少なくとも現在の日本人には、こういう血が流れていることとして、薄気味悪く思う欧米人もおるであらうが、表敬訪問したフィリピン大統領は、この類い稀れなる軍人精神を賞讃した。人間の生き甲斐価値感にもよるのであろうが、

使命感に徹した人間の強さをしみじみと思わざるを得ぬ。たまたま時を同じくして帰国された江崎玲於奈博士は、別にこれに関連して云われたことでは無いが、日本人は与えられた課題に対してやることは、実に秀いでているが、自分が考え自主的に初めてやる能力については劣っているというような発言をしておられたが、しかし軍隊のような特殊の社会において、命令以外に自主的判断によつて勝手に行動されては統制がとれぬであらう。

最近、天野貞祐先生から新著「教育五十年」を贈られた。これは先生の五十年に亘る教育活動の信念を披瀝せられたもので、京大在職中發表された「道理の感覚」以来の先生の烈々たる信念と勇氣に対し感銘する所が多い。吉田総理の三顧の礼を以てする文部大臣就任の懇請を漸やく受けられたが、国民道徳の基準であつた教育勅語が廃止されて、国民の拠るべき規範がないので、所謂「天野構想」「国民道徳構想」の發表を三回許り大臣室に先生を訪問して、お話ししたことをなつかしく思い出すのである。

私の健康法

四国電気保安協会専務理事
藤本悟郎

思えば早いもので、学窓を去ってから早や四十年が来ようとしてゐる。

色々と波乱にとんだ人生を歩んで来た。あの悲惨な戦争の傷跡もどうやらうすらぎ今は平和なおちついた毎日がつづいている。

去る日、幾十年振りかで、ある会合で突然旧友に会い、昔を忍んで大いに痛飲した事がある。学友は昔の運動部時代の仲間で、共に論じ、遊び、楽しい青春時代を過ごした時の思い出話に花をさかした物である。その時友人は私に向つて「君はみた所大変若々しく元気がそうだが何か特効薬でものんできるかね」と矢次早の質問をうけた。友人は昔の面影はなく、疲れ

ている様に思われた。「いや別に何ものんでゐる訳ではない。ただ食事に気をつけているのと、若い頃からずっと運動をつづけている為だろう。走る運動ではないがね。年はとるが気持だけは何時迄も二十歳の青年のつもりだ。頭の毛は次第に白くなってくるが、これは仕方ない。足腰だけは丈夫であらしたい。」

こんな会話を交わし、お互の家

藤本悟郎

庭、子供の事、健康の事なぞ色々話し合つて、別れたが心なしか友の後姿が淋しそうにみえた。その時、しみじみと健康である事は有難いものだと感じた。元来が健康な体質に生まれついているのかも知れないが、長い過去をふり返つてみて、病氣らしいものは一度もした事がない。時に風邪を引く程度であつて、それも仕事を休んで床につく程の事もなかつた。だがやはりそれなりの注意努力をして来た訳だ。

先づ、食事である。私は昭和十二年頃以来ずっと朝はパン食で通している。これは胃に大きな負担をかけず消化がよる。米食は夕食だけが殆んどである。それも年をとるに従つて量を減じ、今は茶わん二杯を限度としてゐる。睡眠は普通だが、出来る限り無理をしない様に、特に徹夜は絶対にさけてゐる。遅くとも十二時前にはねる事を習慣化してゐる。

次に運動だが、結婚後間もなくテニスを始めた。これがやみつきになり今日迄ずっと続けている。戦時中と戦後は少々ブランクになつたが、その後は休日殆んどこ

の為に費している。夫々の地区のクラブに入会し、色々な職業人と接し、交友を広めて来た。技術は大した事もなく、ただゲームを楽しめる程度にはなり、対外戦も度々行ない面白い時代を過ごした。数年前、老後のわが住いの家を鳴門の山の中に作った。徒然草の文句ではないが、わらぶぎではなく鉄板ぶぎの山小屋で、ただ身を入れるに足る広さである。周囲は小高い松林と梨畠に囲まれ、家の窓からは瀬戸の青い海が遠望出来る。

ここに場所を定めてテニスコートを作つた、小屋からわづかの距離である。すぐ横に大きな山桜の木があり、四月中旬には美しい花を染ませてくれ、風に散る花びらはまるで吹雪の様で、コートが真白なる事もある。休日はここでプレーする事を楽しみにしている。多い日には十人近くのメンバーが集り、色々な組合せで終日楽しむ事もある。そんな日は夜、風呂から出てくると、足がガクガクして思ふ様にならない、グツたりする。然し、このあとのビール一杯が何物にもかえ難くおいしい。逆にビールをおいしくのむ為にテニスをやっている様である。

皆が来ない時は早朝から家内と二人で、乱打からシングルをや

雑感

昭和22年卒
中国電力 榎谷守男

暇は畠やら山仕事にとりかかると。テニスは可なり重労働ではあるがやり様によつては左程ではない。然しゴルフ等の運動量とは比較にはならない。腕と腰と足のバランスが大切で、慣れれば気にしなくても自然とうまくやれる。然し、足腰には可なりの力がかかりいい鍛練になる。

同じ様には到底身体が動かない訳だから、年輩者には年輩なみのプレーの仕方がある。それを無理をするところちこちで故障を生じる。夕暮時、夕焼空を眺めつつ、コート整備にかかる頃、小鳥が数羽大空をかけて松林の中にとんでゆく。町中では到底味わう事の出来ない自然との密着である。

この度、会報に寄稿を依頼されたが、中学を卒業して以来、業務用文章のみで、洛友会総会記事を書くことは極めて苦手で、筆不精の最たるものである。しかし、何か書かねばと、気が焦るばかりで参ってしまった。まずい文章で申訳ないが、最近感じたことを書き責を果したい。

二、三日前(三月初旬)のこと、朝起きがけに鶯の声が聞こえた。絶えて久しく聞いていなかった。

たので、早速、家族の者を縁先に呼び皆で楽しんだ次第である。私の家は広島市より三十分程はなれた小きな田舎町で、わずかばかりの竹やぶをもつた庭がある。娘の

話では生れてはじめて聞いたと云うのであるから、二十年近くも聞いていないわけである。昔はボカボカと暖かい縁側で、日なたぼっこをしながらのんびりと鶯の声を聞き春を楽しんだものである。

原因はよく解らないが、戦後、強力な消毒剤の散布で虫類がいなくなり、従つて鶯も来なくなったのではなからうか。また何故今年ひよっこり飛来したのか全く解らない。理由はともかく公害々々の話に明け暮れる現在では、干天の慈雨とも感じられる。戦後、経済の急テンポな大成長で、公害がクローズアップし、そのあらわれの一つとして、自然とのふれあい

トで昆虫をもとめる状態である。産業の発達には喜ばしいことであるが、企業の責任で公害を皆無にしておきたいものである。

人は皆、多かれ少なかれ美にあらざる心を持たない者はないと思ふ。快適な家に住み、美味しい物を喰べ、うまい酒を飲み、美しい衣服をまとい、美しい音楽を聞くとする。宗教もまた美しい心でありたい、美しく生きたい、美しい世の中にならぬという欲望から生れたものではないだろうか。

しかし、美しいと云うことは何んであろうか。人間の六感に快感を与えるものと云った簡単な定義でかたづけられるものだろうか。

或人がこの花は美しいと感じても、他の人は必ずしも美しいと感じない。と云うことは、花そのものに美があるのではなく、それを見る人間の心にあるのではなからうか。美には感動がともなうと思ふ。例えば、書にしても、画にしても幾何学的に整っているだけで美しいとは云わないであらう。私にはよく解らないが、抽象画にも美を感じるだろう。

「どんな人でも美しさを求めない人はないが、何を美しいと感じるか、そこに問題がある。」と誰かが云っていたの思い出した。冬になるとスキーマのテレビが放映される。私は北海道の旭川市に

生れ、中学を卒業するまで住んでいた。冬はスキーしか遊ぶことなく、大雪の時は屋根に積った雪をおろすと、軒先までどき、屋根からスキーで滑ったことを覚えていた。私のスキーは身体で覚えていたと云うか、転んでは滑り、滑っては転びて覚えた我流のものである。広島へ来た当時、冬に近くのスキー場へ行ったが、高校、大学の数年のブランクがあったが、全々不自由を感じず、意識せずにスロープの凹凸に下半身がパネとなつて応動し、障害物があれば避けて滑ることができた。滑るまでは不安であつたが、身体で覚えたスキーのおかげだと思つた。最近のスキーは、板も金具も進歩し、私の持っていたスキーなどは、板ぎれのような感じである。滑り方も理論的に正しいのであろうが、スタイルばかり良く、果して実用になるだろうかと何時も思つていた。リフトにしても昔はなかつた。今は上手も下手も皆リフトで山上へ運ばれ、技術以上の滑降をよぎなくされ、従つて怪我が多いのだと思ふ。時間をかけて自分で昇ることにより、足の準備運動になり、自分の技術に合ったスキーができるのである。私はやはりリフトのない時代のスキーが懐しい。とんでもないスキー談義になつてしまつた。

現代ほど「物の価値」が一定しない時代はないであらう。深刻な石油危機によつてあらゆるものの価値を根本から考え直す必要にせまられたことはいうまでもないが実はそれ以前からこれに類したことはよくあつたことが改めて思い出される。「湯水のように」と形容された水はいまでは貴重な資源であり、「道路に近い」ことは必ずしも住宅地としての良い条件とはいへなくなつてきている。身のまわりを見廻してみても、数年前には珍らしかつたものでいま豊富にあるもの、あるいはその逆のもの、がたぐさんあることにすぐ気づく。

物の価値とファッション

中部電力原子力室次長 坂入武彦

こういつた状況は物の考え方も大きくひびき、ものごとの善悪を判断する基準が時々刻々に變つてゆくのが今の世の中である。経済の動きがゆるやかであつた昔なら、親のモラルがそのまま次の世代に通用したが、いまや親子のあいだで考えの一致するほうが珍らしい。のみならず、同一世代の間にも、生活環境や経験の種類がちがえば倫理観は必ずしも同じではない。

こういつた時代にあつてわれわれが社会的使命を全うするためには何よりもまずみずからの頭脳を柔らかくして、どんな変化にもすぐ対応できる姿勢を身につけておかなければならない。そのためには、ふだんから自分の頭で考え自分の頭で行動する習慣をつけておくことであらう。従来の慣習や他人の行動ばかり気にして積極的の前へ出ようとしないうちは決して社会に對する有効な寄与は生まれないように思ふ。時代の流れはまことに早く、しかもいろんな方向に流れていることを十分に認識して、それを迅速に自分のものとして吸収することがいまほど要求されていく時代はなからう。

つてみても、一時のミニスカート全盛はやや下火となり、ヒザのすこし上ぐらいのや長いやあるいはパンツロンなどさまざま。ただ、世の男性を代表して申し上げるならば、いくらファッションの多様化は時代のすう勢だといつても、やはりスカートは短いのがよろしいようである。

これだけはどうも永遠不滅の「価値観」のようである。

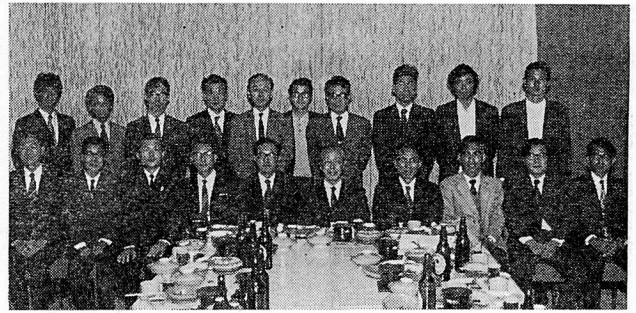
大谷先生歓迎会

電気工学教室の大谷先生が、機械学会日立支部講演にいられたので、十一月十六日、日立製作所国分工場鮎川クラブに於て、歓迎会を開きました。

出席者は、日立製作所茨城県地区の電気系卒業生で、北野国分工場長以下十九名。

大谷先生より、学校状況や、エネルギー問題の話、さらには照明に関する文献の紹介など、興味深い話があつた他、卒業生より、自己紹介や家族状況、仕事状況など報告して、三時間余り歓談しました。

- 出席者 大谷先生
- 北野豊(昭24) 秋丸舜二(昭28)
 - 上田源三(昭31) 広豊(昭33)
 - 日向成行(昭33) 大西和夫(昭33)
 - 川本幸雄(昭34)



大谷先生歓迎会記念茨城県地区
京都大学電気卒業生一九七
三年一月一六日

- 川野滋祥(昭35) 乾芳彰(昭37)
- 尾形文夫(昭39) 川上寛児(昭39)
- 堀雄太郎(昭43)
- 野田時敏(昭45) 本田永信(昭45)
- 吉原進(昭45) 阿部重夫(昭45)
- 野木正彦(昭46)
- 渡辺優(昭46)

アメリカインディアン

昭40・電気工学科卒
四国電力(株) 武智泰三

古い日記を整理していたら、数年前にアメリカ西部を十日間ほど旅行したときのがでてきた。先頃ウィンデットニー事件でひとしきり話題となったくらいで、普段は専ら西部劇映画に出てくるだけのインディアンとの出会いを少し御紹介しておこう。

旅行の振出しはアリゾナ州主都フェニックス。七月の初めというのにもう連日四十度を越える真夏である。ここから一〇〇マイルほど南へ行けば西部劇で有名なツーソンの街、更に五〇マイルほどでもうメキシコとの国境に出る。暑くならないうちに、夕べ手配しておいた新車のレンタカーで今夜の宿グランドキャニオンを目指して出発する。

途中観光客から、大陸横断道路で有名なルート66と交差するところにフラグスタッフという街があり、そこで年に一度のインディアン大祭(POW WOW)をやっていると聞いて、さっそく道草をすることにした。

現在アメリカには一〇〇種族以上、約五〇万人のインディアンが

居るといわれている。そのほとんどが西部の居留地にとじこめられている。否、自らとじこもっているというべきかも知れない。アメリカ政府はこれまで幾度となくアメリカ人として生活するよう説得してきたが、インディアンは頑として応じない。インディアン達の言分はこうである。

「この大地は我々のもの。好きなところで好きなように生活することが何故できないのか。何人ももうこれ以上我々の世界に入らないで、そっとしておいてくれな

いかに。」
彼等、今でもこの気を持っていらっしゃるらしい。手を焼いた政府は仕方なく居留地制度を設けたという訳である。つまりインディアンは定められた居留地に居る限り、好きなように生活してよいし、税金も支払わなくてもよい。しかし一歩でも外に出て生活しようものなら、アメリカ人として扱うというものである。

彼等とはかく貧しい。家は六畳一間くらいのプレハブ風の小屋と、昔ながらの土小屋に住み、未だに電気もない。その生業といえ

ば、赤茶けたカラカラの岩山と瓦礫ばかりの、およそ牧場とは似ても似つかぬ荒野に、やせた馬と羊を飼って、土産物用の皮細工や織物それにトルコ石の飾物を作って細々とやっていくくらいのことである。

黒人問題やヒッピー騒ぎの陰にかくれて、インディアンの存在はちっとも目立たないが、ある意味ではもっとも根の深い問題なのかも知れない。あの文明を、豊かさ、自由をそして民主主義を誇るアメリカに、こんな部分があろうとは思ってもみなかった。

ここでインディアンの部族会長の横顔を紹介しておこう。もう七〇才に垂んとするじいさんだが、これがどうしてすごい経歴の持主である。ハーバード大学で社会学を学び、航空工学の学士号を持ち、飛行機会社のマネージャを経たのち、NASAに入りポラリスミサイルの設計にたずさわったという傑物である。

さてPOW WOWの方は、さしづめ天神さんの縁日を御想像いただければよい。一年に一度全ての部族が一堂に会し、祭を楽しまうというのである。道端にはずらりとインディアンの土産物屋が店を連ね、広場には移動式メリーゴランドや白人の大道芸人の小屋

が所狭しと並んでいて、大層賑わっている。一張羅の衣裳を着けたインディアン達が沢山居る、居る。中には一日がかりでやってきた連中も居るようだ。ここに集ったインディアンは色が少し黒いのを除けば、顔といい、体付といいとても日本人に似ている。英語はできるがあまり上手くなく、お互い同志はほとんどインディアン語を使うところなど、アメリカの日本人そっくりで気持ちが悪いくらいである。

記念にとトルコ石の飾物を買う積りで店をのぞいてみる。ちょっといいのは四ドル、五ドルもある。着飾ったインディアン達の腕や首につけている小ぶしくらいのだと、一体どれくらいするのか。

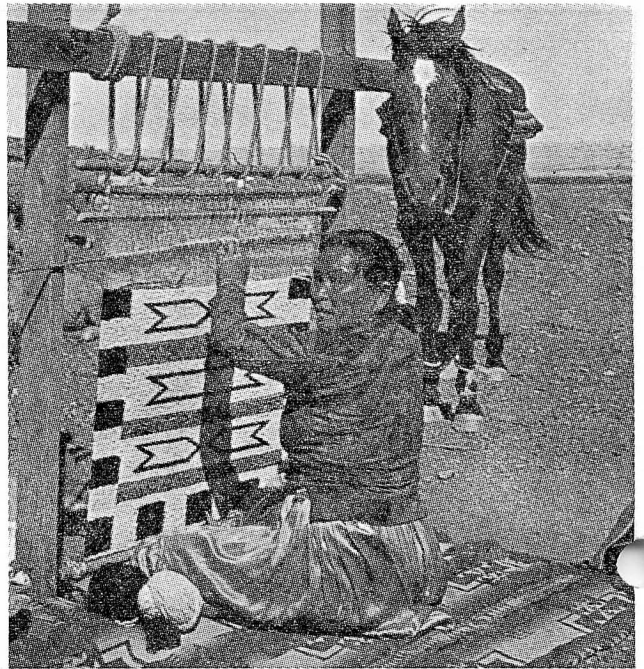
私「このきれいなペンダントいくらかな。」

インディアンのバアさん「娘は二十五ドル欲しいと言っていますけど、お客さんなら二十ドルでお売ります。」

娘なんぞはどこにも居やしない。傍にはじいさんがいるだけである。

私「じゃこれ二つ買うから少しまけてくれないかな。」
バアさん「娘はがっかりするだらうけど、二つで三十五ドル





にしときましょ。」

何で娘、娘というのかよく解からない。でもひよっとするとバアさん達隠居の身で、家では娘が居て土産物を作っているのかななどと思ってみたが、どうもおかしい。そこで二、三ほかの店で聞いてみたがやっぱり娘という言葉を使う。結局考えたって解らないし、それほど大したことでもない。これは、「お客に第一人称の私を出すのは不作法に当たるといけないので、それで居もしない娘を出してくるのである。」と独り合点することにした。

そのあと家畜の匂いのぶんぶんする競技場でインディアン達のロデオをしばらくみて、一路グランドキャニオンへと急いだ。

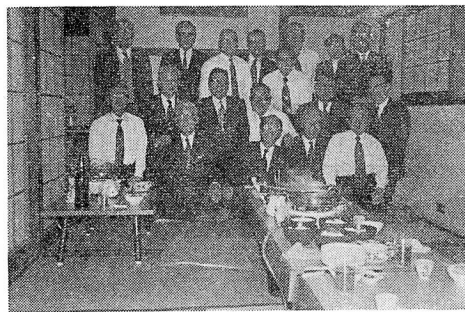
車のラジオで、ルーズベルト時代に、TVA政策で召上げたインディアンの聖地の一つの湖を、永年の交渉の末、やっとインディアンに返還することに、ニクソン大統領が調印したというニュースをやっていた。お陰で、アメリカ人にはトリッキート・ニクソンとあだ名されるニクソン大統領も、インディアンにだけは、歴代の大統領の中で最も話の解かる大統領と評

判がよいわけだ。

第一〇回らっきょう会

(洛京会)

恒例のらっきょう会(東京在住昭和八・九・一〇・一一年卒業者の会)を二月二十一日新橋駅前「両国」で開催致しました。出席者一八名。



ちゃんこ鍋を囲んで半年振りになごやかに談笑致しました。次回予定は本年八月一日(木)です。

出席者は左の通り。
蒲生朝郷、田井梁之、田中信高、西山安三(昭八)
石川弘文、市村宗明、大塚順丈、河野勝也(昭九)
有馬敏彦、塩沢弘、清水威寛、

高木正(昭二)

古池弘正、福光勉、杉本省一、

高木一雄、中山健一、綿谷正義(昭二一)

(幹事 石川弘文)

計報

大・9 中村 恵亮 48

大・14 岡田 市治 48・12・31

以上の方々がご逝去なさいました。
謹んで哀悼の意を表します。

会費値上げの

予告に就て

最近の物価値上げのやかましい折に会費値上げ問題を持ち出すのは、誠に気が引ける次第ですが、洛友会の主たる事業の名簿発行と、三ヶ月に一回の会報出版に対し、印刷代、紙代の高騰により、赤字決算となり、己むを得ず、今回の総会に値上げ案を審議して頂くことになりました。

このことに就きましては、去る二月十六日に常任役員会を開催し、予め御審議を頂いた次第です

が、正式には来る六月二日の総会の御承認を得ねばなりません。その結論として、

本部会費 千七百元
支部会費 七百元

とすることを原案と致しました。印刷代の節約のために、四月よりの振替用紙には、既に会費値上げが、承認されたものとして、會員の皆様のお手許に届きますが、何卒事情を御諒承賜わり度くお願い申し上げます。

事務局としては、会費納入率の向上を図ると共に、名簿の一層の正確さと会報による親睦をより向上せしめ度いと努力致しますので、各位の御理解を御願ひする次第です。

○会費納入用の振替用紙の通信欄の氏名、勤務先住所は明確に御記入下さい。これが名簿の原稿になりますので、よろしく御願ひします。

○昭和四十七年度以前の会費未納は、一応キャンセルしますので今後の会費納入に御協力下さい。

(幹事山本記)



昭和四十九年度

洛友会総会通知

一、日時

六月二日(日) 午前十時半より受付開始

二、総会及び懇親会々場

京都ロイヤルホテル(電075-223-1234)
(京都市河原町三条上ル)

三、日程

午前十一時 本部総会・関西支部総会
議案 一、事務並びに会計報告

二、昭和四十九年度予算審議
(会費値上げの件)

本部会費 千七百円
支部会費 七百円
計 二千四百円

三、役員改選の件

十一時四十分 映画上演(関西電力(株)提供)

十二時三十分 懇親会
午後二時 散会

四、会費

会員並びに同伴者(大人) 二千円
小 人 千円

。会費は別紙振替用紙をもって、お払込み下さい、なおこれをもつて、総会並びに懇親会出席御通知に代えますので、五月二十日までには到着する様お送り下さい。
本会合には御家族同伴を歓迎することになっておりますので多数お申込下さい。

近刊予告
毎月10日発売

電 気 評 論

定価 400 円
送料 28 円

4 月 号
特 集 ◆ 最 新 の 給 電

1. 概 要.....中部電力
2. 最新の給電施設.....東京電力
3. 総合自動化.....中部電力
4. 運 用
 - (1) 電力系統の拡大に伴う
系統運用の新方策.....関西電力
 - (2) 500kv 系統の給電運用.....東京電力
 - (3) 切迫せる電力需給と
今後の問題点.....関西電力
 - (4) 佐久間周波数変換所の運用方法
と運用実績について.....電源開発
5. その他
大黒部幹線シリーズ
コンデンサ試験の概要.....関西電力

5 月 号
特 集 ◆ 架 空 送 電

1. 送電線の環境対策.....関西電力
2. 大容量架空送電線の
設計について.....東京電力
3. 最近の内外における
送電線の着氷雪事故.....北海道電力
4. 送電線の異常振動.....古河電工
5. 送電用鉄塔設計の最近の動向.....電源開発
6. 送電線耐雷設計の最近の問題点.....中部電力
7. 送電線工事の近代化.....古河総合設備
8. 笠取山大容量試験送電線による
機械的諸現象に関する実験.....中部電力

株式会社 電 気 評 論 社

京都市左京区田中大堰町49
電話 京都 (075) 701-2582 〒606